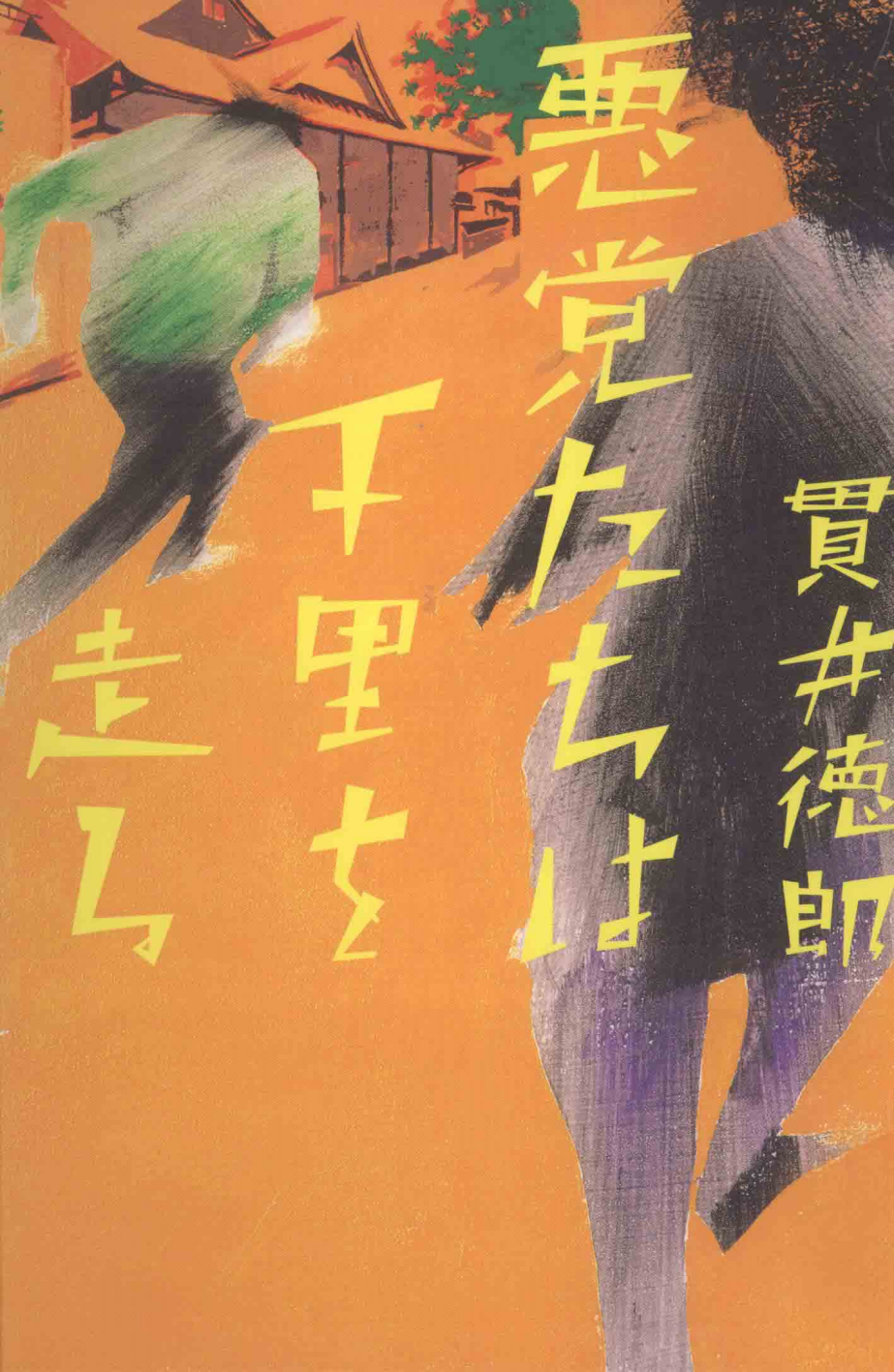


貫井徳郎

悪党はたまたま

下里土

走馬



悪党たちは千里を走らぬ貫井徳郎

光文社

悪党^{あくどう}たちは千里^{せんり}を走^{はし}る

二〇〇五年九月二十五日 初版一刷発行

著者*貫井徳郎^{ぬくいとくろう}

発行者*篠原睦子

発行所*株式会社 光文社

〒一〇二一八〇一一

東京都文京区音羽一―一六―六

電話 文芸編集部〇三(五三九五)八一七四

販売部〇三(五三九五)八一四

業務部〇三(五三九五)八一二五

印刷所*慶昌堂印刷

製本所*榎本製本

落丁・乱丁本は業務部へご連絡くだされば、お取り替えいたします。

[R]本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(〇三―三三―四〇一一―二三八二)にご連絡ください。

悪党たちは千里を走り

イラストレーション 佐々木啓成
ブックデザイン 鈴木成一デザイン室

1

門構えは威圧的なまでに立派だった。高さはおよそ五メートル、幅は二十メートルといったところか。ご丁寧にも、上部には忍び返しがついている。いかがわしい者は一歩たりとも入れないぞと、門自体が語っているかのようですらあった。

高杉篤郎^{たかしきつろう}は門の制作者の意図どおり、すっかり及び腰になっていた。これまで小金持ちを騙^{だま}したことは何度もあるが、こんな豪邸に入^{はい}った経験はない。おそらく主^{あるじ}は儲け話^{もうけわ}をうんざりするほど耳^{みみ}にしているだろうから、用意してきたでたらめが通用するの^のか不安になつてきた。

「ア、アニキ。なんか、思ったよりもでかい家ツスね」

横^{よこ}に立つ園部^{そのべ}も、完全に威圧されているようだ。もともと強面^{こわもて}の割には気が小さい園部だが、今日はいつにも増して声が震えている。それを聞いて高杉は、なんとか虚勢を取り戻した。

「あ、ああ。まあまあかな。いかにも田舎の成金だよな」

田舎の成金というのは事実だ。近くに家畜小屋でもあるのか、芳しい糞の匂いが漂ってくる。見るからに、余っていた土地に余ってる金でかい家を建ててみましたといった佇まいである。だとしたところで、都会の貧乏人の方が立派という理屈にはならない。金持ちを前にして腰が引けるのは、古今東西を問わず貧乏人の性である。

「こ、こんな金持ちが、オレたちの話に乗ってきますかね」

早くも園部は弱気なことを言っている。高杉は自分の内心を見抜かれたような気がして、逆に強がった。

「ば、馬鹿やロー。オレ様の話術を信じないって言うのかよ」

「いえいえ、そんな。オレはアニキの話術を信じてますよ。じゃあ一発、すごいところを見せてください」

「い、言われなくてもそうするよ。今、ブザーを押そうとしたところじゃないか。見てろよ」

いつもコイツのせいで引込みがつかなくなるんだよね、という嘆きを胸の底に押し込め、高杉は呼び鈴を押した。時刻は約束の七分前だった。

「はい」

インターホンからは、中年女性の声が聞こえた。この家の夫人か、はたまたお手伝いさんか、見当がつかない。仕方なく、高杉は無難な口調で偽名を名乗った。

「お約束をちようだいしております、山本と申します」

「ああ、山本さんね。お待ちしましたわ。どうぞ」

気さくな口振りからして、お手伝いさんではなく夫人のようだ。声と同時に、いきなり門が開き始める。まさか電動とは思わなかったので、高杉も園部も飛び上がりそうになるほど驚いた。

「アニキ、電動ツスよ。どうしよう」

園部が小声で囁く。高杉は一步を踏み出しながら、眉を顰めてみせた。

「アホ。どうしようだったって、いまさらどうしようもないじゃないか」

「オレ、門が電動で開く家になって、初めて入るツスよ」

「情けない奴だな。お前もそろそろこういう状況に慣れておけ」

そう言う高杉も、もちろんこんな豪邸は初めてである。緊張のあまり、右手と右脚が同時に前に出たりしないかと心配した。

部屋数がいったいいくつあるのか見当もつかない大きな屋敷前に辿り着くと、玄関ドアが開いた。小太りの、いかにも人のよさそうな笑顔を浮かべた中年女性が出迎える。大粒の真珠のネックレスを三組も首から下げているのは、田舎成金ならではのご愛敬だ。高杉と園部は、「お忙しいところ申し訳ありません」とぺこぺこ頭を下げながら屋敷内に入った。

応接室に案内され、一瞬硬直した。今度は圧倒されたわけではない。感情を強いて表現するなら「戸惑い」か。何しろそこは、田舎のハイセンスなホテルのロビーにそっくりだったのだ。

壁に掛かっている水墨画はまだいい。その前に花でも生けてあれば、上品な雰囲気と言えただろう。だがそこにあつたのは雉の剝製である。そして床に敷いてあるのは虎の毛皮。やたらてかてか光る黒いソファと、テーブルの上には蛇皮をあしらつたライター。水墨画を掛けてある壁の反対側には、鹿の首の剝製まで飾つてあるのだから、悪趣味もここに極まれりだ。園部が「ぶぶつ」と吹き出しかけたので、足の甲を踏んで黙らせた。

「いやー、豪華なお部屋ですねえ。この虎の毛並みの見事なこと。さぞや高かつたんじやないでしょうか」

夫人が怪訝そうに振り返つたので、高杉はすかさずお追従を口にした。調子のいいことを言うのは得意中の得意である。

「おわかりになりますか？ これはマレーシアから特別に取り寄せたもので、なかなかお値段が張りましたのよ」

ほほほほ、と夫人は口に手を当てて笑う。マレーシアから取り寄せたというのがあまりに型どおりで、いかがわしさ満点だった。

ちようどそのとき、壁掛け時計が鳴り出した。ゴテゴテと金のデコレーションを施された時計からは、天使が飛び出して踊り始める。緊張して時間感覚が狂っているが、門からここに辿り着くまでもう七分も経つたらしい。こんなだっ広い家に住んでるとかえつて不便ではないかと、高杉は密かに思った。

「ちよつとこちらでお待ちいただけますか。主人は先客との交渉が長引いて、まだ手が

空かないですよ。時間ちようにいらしていただいたのに、ごめんなさいね」

「あ、どうぞお気になさらず。何時間でも待たせていただきますので」

答えてソファに腰を下ろすと、あまりに深く沈み込んでひっくり返りそうになった。慌てて体勢を立て直し、夫人に笑いかける。夫人は「少々お待ちください」と言っ、部屋を出ていった。

「アニキ、すごい趣味ツスね、この人。日本にもまだこういう人が生き残ってるんですね」

「うるさい。よけいなこと言うな」

腿を^{もも}抓り上げると、園部は声を殺して痛がる。高杉は耳を澄ませ、かすかに聞こえてくる会話に注意を向けた。

この家の主らしき男の声と、それから女の声が隣室から聞こえる。どうやら先客は女のようだ。「交渉」というからには、単なる知人ではなく取引相手なのだろう。どんな商談なのかと、断片的に聞こえる言葉から推察しようとしたが、よくわからなかった。

待っている間に夫人がお茶を持ってきて、また出ていった。口をつけると、さほど高級そうな味はしなかった。その辺のスーパーで売っている番茶の味だ。本当の金持ちはこういうところでケチらないものだろう。どういう心がけでこの財力を得たのか、よくわかる気がした。

十五分ほどして、ようやく主人が姿を見せた。金本^{かねもと}という名のこの家の主は、三本の銀歯

が見える笑みを浮かべながら、「どうもどうも」と部屋に入ってくる。でつぷりと肥えた体に和服が似合い、それなりに貫禄かんろくがなくてはならないものの、胸元からはみ出したもうもうたる胸毛と、額に浮かべた汗がいかに暑苦しい。金本はテーブルを挟んで高杉たちの正面すむに坐ると、「いやー」と切り出した。

「お待たせしちゃったねえ。今、隣で待たせてるお姉ちゃんが美人でさあ。ついつい長話しちゃったよ。セールスは絶対美人の方が得だね。買う気はなかったのに、乗せられてよいなものまで買っちゃった」

わははは、と金本は豪快に笑う。「そうですか」と高杉も穏やかな笑みで応じた。しめた、今なら財布の紐ひもも緩んでいる。いいタイミングで来たもんだ。内心でほくそ笑んだ。

「何をお買いになったんですか？」

取りあえず雑談のつもりで訊いてみた。金本は案の定、よく訊いてくれたとばかりに即答する。

「ルノアールだよ、ルノアール。ルノアールなんちゅうと目ん玉飛び出るほど高そうだけど、リトグラフだからね。本物のルノアールが五十万なんて、ただみたいなものじゃないか。なあ、君。そう思わないかね」

「それはもうお値打ちものですね。素晴らしいお買い物をなさったと思いますよ」

「うんうん、そうだろうさうだろう」

金本はすっかりご満悦だった。だが高杉は調子を合わせながらも、眉に唾つばをつけていた。

リトグラフ？　いかにも怪しい話じゃないか。さては隣にいる女はご同業か？

金本はひとしきり、いかに自分が賢い手かと自慢を垂れた。高杉も適宜^{てきぎ}合いの手を入れ、気分をより盛り上げてやる。そうして気が大きくなれば、こちらの話もしやすくなるのだ。家構えの立派さに圧倒されたものの、蓋^{ふた}を開けてみればやっぱり田舎の成金は田舎の成金だ。高杉はすっかり自信を取り戻していた。

「ところで金本さん、今日は私もすごくいいお話を持ってきたのですよ。ルノアールに負けず劣らず気に入っていただけだと思います」

適当なところで本題に入った。このまま黙っていたら、永久に自慢話を聞かされそうだった。

「ああ、そうだそうだ。なんのために来てもらったのか忘れるところだった。いや、君の話もいいよね。ロマンがあるよね、ロマンが」

そう言つて金本は、太い芋虫のような指でテーブルのたばこ入れからたばこを取り出した。蛇皮のライターで火を点け、ふーっと煙を吐き出す。たばこの銘柄はハイライトだった。

「で、徳川幕府の財宝が出たつて言うけど、本当なのか？」

金本は笑っていたが、目は真剣だった。逆に高杉は笑いを引つ込め、真顔で答える。

「本当です」

「あれだろ？　幕末に小栗上野介^{おぐりこうずけのすけ}が隠したつていう財宝だろ。いつだったかテレビ局がなんとかってコピーライター使つてさんざん掘り起こしたけど、結局何も見つからなかったじ

やないか。あんなもの、そもそも存在しなかったんじゃないの？」

隠し財宝伝説では最もポピュラーな話だけに、学がなさそうな金本でも知っていた。というか、こういう学のない成金に限って、金にまつわる話には聡いものである。

「あるんですよ、それが」

高杉はそんな必要もないのに身を乗り出し、声を潜めた。金本もつられて、耳を突き出す。「実はここにいる寺田はですね」と園部を指差す。「こんなアホ面してますが先祖はれっきとした旗本なのです。まあ旗本とはいっても三十俵二人扶持、貧乏旗本の典型ですが、勤めている先が振るってました。幕末には勘定奉行所にいたのですよ」

「ふんふん」

金本は半信半疑の振りをしつつも、すでにかなり話に引き込まれていた。こりやチョロい、と高杉はこぼれそうになる笑みを押し殺す。

「ご存じですが、当時の勘定奉行は小栗上野介です。つまりコイツの先祖は小栗の直属の部下だったわけですよ」

「なるほど。で？」

「俗に小栗上野介の隠し財宝と言われますが、もちろん小栗がひとりで何万両という財宝を埋めたわけではありません。実際に働き手がたくさんいたわけです。そうした工夫を差配したのはもちろん小栗ではなく部下たちであり、寺田の先祖もそのひとりです」

「ほうほう」

「そういうわけで寺田の先祖は、財宝を埋めた場所を正確に把握していました。本来ならそれを書き残すことは固く禁じられていたのですけど、上司の言うことを聞かない部下はいつの時代もいるもので、寺田の先祖は文書にしていたのです」

「いいじゃないか。それから？」

「この寺田の実家は特に金持ちというわけではないんですけど、そんな次第で家柄だけは古いものですから、ごちゃごちゃとゴミみたいな古道具がたくさんあるんです。その中から金目のものはないかとコイツが漁^{あき}つてみたところ、誰にも見せちゃいけないと書いてある文書が出てきた。見せちゃいけないなんて書いてあったら、見たくなるのが人情ですよ。ですが悲しいことに、コイツは古文書を読む能力などほとんどないのです。表紙の注意書きがいろいろと読めたのは奇跡みたいなものでして。それで私のところに持ち込んできたわけですよ」

「君はもちろん、読めたわけだ？」

「まあ、多少は」

少し謙遜^{けんそん}しておく。実際には旧字旧仮名遣いの文章など、一文字も読めないのだが。

「君は本業は経営コンサルタントなんだろ。それなのにそうした文章にも通じているわけか。大したものだな」

「恐れ入ります。で、読んでみて驚きました。何しろ中身は徳川幕府の隠し財宝について書いてあるわけですから。しかも巷間^{こうかん}言われているように群馬の赤城山に財宝は埋められたわ

けではなく、他の場所だというのだから大発見ですよ。私はさっそく現地に赴いて、掘ってみました。すると、こんな物が出てきたのです」

そう言つて高杉は、鞆から袱紗包みを取り出した。何も袱紗に包む必要はないのだが、こうした場合はそれらしさが大事である。テーブルの上に置き、もつたいをつけた手つきでゆつくりと開いた。

「こ、小判じゃないか」

金本は現金にもごくりと喉を鳴らした。高杉はゆつくりと頷く。

「そのとおりです。これは私と寺田で五メートルほど掘り下げたら出てきました。ここにお持ちしたのはこの一枚だけですが、実際には二十八枚の小判を発掘しました」

もちろんそんなに小判があるわけもない。袱紗に包んである小判は、単に古銭商から買った物である。それを念のため、古さを醸し出すために二日間土の中に埋めた。掘り出した後も、綺麗には洗わずわざと土を残しておいた。こうした小細工は、小手先の技術のように見えてかなり有効である。

「に、二十八枚。これは一枚いくらに相当するのかね」

「さあ。そこまでは専門外なのでわかりかねますが、単なる金の固まりと見ても、そうですねえ、一枚三万円にはなりましようか」

「三万円か。ということは八十四万円。君たちもずいぶん儲けたじゃないか」

「ええまあ。ただ、小栗の財宝はこんなものではないはずなんです」

「そりやそうだろう。いったいいくら埋まっているのかね」

「ざっと三百六十万両」

「三百六十万両というと、ええと、いくらだ。九百、九千……、ん？ 一千億？」

「途方もない数字ですよね」

口だけならいくらでも大風呂敷を広げられるのだが、高杉の落ち着いた態度を金本はかえって信頼したようだった。

「そ、そ、それを君たちはどうしようと思っているんだ？」

「こういう場合、この財宝は誰の手に渡るのかと調べてみたのです。そうしたらまず一部は土地の権利者のものになり、一部は発見者、つまり我々のものになるのですが、残り大半は国庫に納められてしまうのです。それがわかって我々は、ちよつと不満に思つたのですよ」

「そりや当然だ。人間として当然の反応だな」

金本はうんうんと小刻みに頷く。当然かよ、と内心で突つ込みつつも、高杉はそんな思いをおくびにも出さずに続けた。

「自分たちだけで掘り出したら、一千億円ですよ。これをわざわざ国に渡してしまうのは、あまりに馬鹿正直かなと考へてしまったのです」

「いやもう気持ちわかるよ。うんうん。で？」

「ただ残念なことに、私たちの力だけでは三百六十万両もの嵩^{かさ}がある財宝を掘り出すことはできません。掘り出すにも運ぶにも、それなりの器材が必要ですから。どうしようかと困つ

ていたところに、たまたま知人のつてで金オさんのお話を伺ったものですから、こうしたことにもしご興味があればと思つて伺つた次第でして」

「興味はあるぞ。財宝発掘なんて男のロマンじゃないか。ロマンはいいねえ」

金本の口にするロマンとは金の同義語にしか聞こえないのだが、高杉にとって強欲な相手はありがたいだけだ。ここぞとばかりに、さらに声を低める。

「お力を拝借できますか」

「おれにできることだったらなんでもしようじゃないか。器材つてのにはいくらかかるんだ。三百万か、五百万か？」

「掘り出すためにブルドーザーと、運ぶためにトラックが必要ですね。両方ともレンタルでもいいのですが、特にブルドーザーはいつどこで使うか申請しなければならぬのがネックです。だからいつそ中古で買つてしまつた方がいいと思うのですよ。そうなるとブルドーザーを運ぶためのトレーラーも必要になる。それから地権者に口止め料も必要になる。もちろん地権者に正直なことなんか言いませんよ。掘り出すんじゃない、逆に埋めたいものがあるからと金を握らせるのです。こんな言い方をしておけば、産業廃棄物を埋めるのだと勝手に解釈してくれます。どうせ遊ばせてる土地ですから、先方にとつては痛くも痒くもない。二本ばかり握らせりゃ、何を埋めたかも詮索してこないでしょう」

二本とは二百万円の意味である。金本もそんな隠語に精通しているのか、いちいち訊き返しては来なかった。